北星学園大学文学部北星論集第48巻第２号（通巻第55号）（2011年３月）・抜刷

韓国強制合併と日本のキリスト教

――旧日本基督教会を中心に――

古　賀　清　敬

韓国強制合併と日本のキリスト教
――旧日本基督教会を中心に――

古　賀　清　敬

はじめに
Ⅰ．明治期以降の日朝・日韓関係史のあらまし
―不平等条約の強要から，韓国強制合併前後までを中心に―
Ⅱ．韓国強制合併前後の旧日本基督教会の論調
Ⅲ．朝鮮人の日本観
Ⅳ．結語

はじめに

1910年，日本は大韓帝国の主権を全面的に奪い，それまで着々と進めてきた植民地支配の足場を固めた。それ以降の日中戦争や「大東亜戦争」はこの植民地支配を踏み台として突き進んだにもかかわらず，戦争の惨禍に比べて植民地支配についてはあまり語られてきていない。植民地支配は，一過性的な戦争と異なり，社会全体をまきこんだ「日常生活」の要素を色濃く帯びているゆえ，批判的対象とするのが困難であるといえよう。しかしそのことを欠落させたまま今に至っている事態が，かつての戦争への記憶において視野の狭さと底の浅さとなって現れているのではないだろうか。

そのような問題関心の中で，本論考では，日本による韓国強制合併[1]前後の歴史的経緯とその中での日本のキリスト教，とくに旧日本基督教会（以下，「旧日基」と記す）の言説とを照合しながら検証を試みていく。キリスト教のもうひとつの大きな流れである組合教会が日本帝国政府と癒着した形で「朝鮮伝道」をおこなったのにくらべて，旧日基の場合は政府とは一定の距離をおいて対応したことは事実である。そこには，外国の宣教団体および国家からの独立を重んじるという旧日基の精神がはたらいていたともいえよう。しかし，では何も問題がなかったのかというと，当時の論調や行動を一瞥するだけでもけっしてそうではないことはあきらかである。では，どのような問題点があったのか，またそれは同時代の中でいかなる要因によるものなのかを検討し，確認していきたい。

Ⅰ．明治期以降の日朝・日韓関係史のあらまし[2]
―不平等条約の強要から，韓国強制合併前後までを中心に―

1）おしなべて19世紀後半は，東アジアに対する欧米列強の侵略が強化された時期であるといえよう。日本は，米，英，仏，露，蘭，独から，治外法権・関税自主権の放棄・最恵国待遇という不平等条約を強いられた。これに対応して，日本では天皇中心の絶対主義的統一国家をめざし明治政府を樹立する。しかし，新政府は，農民層の分解や封建的生産関係の存続という内部矛盾をかかえ脆弱な権力基盤であった。あわせて没落不平士族問題，幕府期の重い租税の軽減をもとめる民衆の期待が克服すべき課題として立ちはだかってい

キーワード：植民地，「韓国併合」，旧日本基督教会，キリスト教

た。このような不安定な状況の中で，明治政府は，天皇制国家を維持・強化する資源を確保するために，欧米列強の真似をして他国を侵略する道へ走ったのである。征韓論（1873）は，政府重鎮には当然のこととして共有されており，ただその時期で論争があっただけというのが実態である。すなわち，欧米に侵略された側の日本が，その真似をして，欧米の了解と力を背景に他国を侵略する側にまわろうとしてきた，というのが近代日本の概略である。

2）日本は，1875年，江華島に軍艦雲揚号を送って朝鮮を挑発し，それに対して攻撃したことを口実に，翌年強引に日・朝修交条規を結ばせた。これは，日本が欧米列強から結ばされた条約よりもさらに不平等なもので，関税自主権の放棄よりひどい無関税特権や朝鮮からの米の輸出の自由化も強要した。日本にはまだ貿易取引できるような独自の生産品はなく，朝鮮と欧米との仲買貿易で，朝鮮の生産品を安く買って欧米に高く売ることによって巨利を得ていったのである。

また，明治政府は積極的な移民政策をとり，朝鮮にも移住を奨励した。これは，国内の貧困問題や政府批判層を移民政策で解消しようとの意図でもある。朝鮮に行けば有利な条件で事業ができるという餌を蒔いたわけである。これは功を奏し「在朝鮮」日本人と「在日」朝鮮人の人口比較に歴然と表わされている。[3)]

「在日」朝鮮人の数の推移と，「在朝」日本人の推移を比べると，1920年ごろまでは朝鮮にいた日本人の方が二桁違いに圧倒的に多い。しかも強制合併した1910年前後に在朝日本人は飛躍的に増え（171,543人，ちなみに在日朝鮮人は790人）ている。在日朝鮮人が増加するのは，土地調査事業（1910年～）という口実によって土地を奪われた影響が出てくる1920年代からで，それでも1935年で625,678人（在朝日本人は619,005人）とようやく在朝日本人を超えている。さらに1940年代前半の強制連行期に一挙に100万人，1944年には200万人に迫り，さらに表にはないが敗戦時には230万人を超えている。

つまり，朝鮮に渡って有利な条件（たとえば，朝鮮総督の許可制で日本企業との合弁しか認めない「会社法」，同じ仕事をしても給料は日本人の半分から三分の一程度など）で稼いだ日本人は相当多く，他方，そのため生活に窮した朝鮮人が日本に来ざるを余儀なくされた，というのが浮き彫りになっている。よく在日朝鮮人の渡来について，「朝鮮は貧しいから日本に出稼ぎにきている」，「自由意志で来たから強制ではない」とか「日本人だって徴用・徴兵されたのだから同じだ」と言われることがあるが，それは両者の置かれている経緯と状況がまるで違う事実を黙殺した虚言にすぎないことがこれによってもあきらかである。

3）しかもここで誤解してならないのは，朝鮮がはじめから貧しかったのでもなく，日本と比べて近代化が遅れていたわけでもないということである。むしろ，朝鮮独自の近代化への動きはすでに1860年代から加速化が始まっており，それゆえの社会層間や方向性をめぐる葛藤が起こっていた。その事情は日本の幕末でも同様であり，日本による門戸開放が朝鮮近代化の起点ではない。朝鮮王朝時代では，民衆の側からは，税制の改革要求や農民層の両極分解の進行，また鉱業・手工業・商業などは官営の特権事業体制から民間活動が中心となり，資本と生産者が台頭してくる。それらに対する皇室や両班貴族層からの封建体制維持の動きとの対立が生じ，さらに外国勢力への対応をめぐっての確執（開化派と衛正斥邪派）が複雑にからんでくる。一方，為政者側でも，のちに大韓帝国を宣布（1899年）した高宗（コジョン）皇帝は，都市計画や金融・郵便・鉄道事業など積極的に近代化を進

めていた。また，日本の侵略的意図に対して，独自の外交の確立によって阻止しようとの努力を続けてきた。それを、その同志であり伴侶である明成皇后（閔妃）を皇居に襲い虐殺する（1895年）という露骨な暴力手段で，高宗と韓国民衆を恫喝したのである。

また，東学党の決起に端を発して全国的に広がった甲午農民戦争（1894年～）に対しても日本政府は朝鮮王朝政府軍と共に過酷な弾圧を行い，数年間で一般良民をふくむ30～40万人もの民衆を殺戮した。「日清戦争」という名称が，この血なまぐさい実態を隠す機能をはたしているのはたしかである。甲午農民戦争が「反封建・反侵略」の性格をもっていることを正しく把握するなら，それは日本の侵略への広汎な朝鮮民衆の当然の抵抗であり，日本への命をかけた意思表示であることを忘れてはならない。

そのように日本は，韓国独自の近代化を妨害しておいて，「朝鮮は自力で近代化できず，独立の力もないから日本が助けてあげるのだ」という口実を内外にふりまいて，植民地支配への道を突き進んだ。

４）日露戦争（1904－５年）は，困難を克服しての東洋人の勝利が華々しく語られるが，国際的名誉以外に「実益」はほとんど無く国民の不満は募っていた。実際には，戦争費用19億8,400万円中12億円はアメリカとイギリスが提供しており，莫大な借金返済や貧困対策が，植民地化強行の隠された大きな要因のひとつであった。

その一方で，大国ロシアを打ち負かして日本はやっと世界の「一等国」に仲間入りしたという誇りが蔓延し，さらに植民地を持つほどにまでなったというごう慢な気分が大勢を占めていた。日本人に国民としての意識（ナショナリズム）が醸成され，誇示され，浸透したのもこの頃からであると言われている。ここで付記しておきたいのは，司馬遼太郎氏の『坂の上の雲』である。彼はこのような日本のあり方を一面的に肯定的に評価するだけで，戦場とされ踏みつけられた朝鮮側の視点が欠落しており，たとえ虚構をふくむ歴史小説とはいえ，多くの日本人の歴史認識に共通している深刻な問題性をはらんでいる。現に，日露戦争後の1905年，韓国の外交権を剥奪する「第二次日韓協約」が，伊藤博文がソウル市内を軍隊で固め，大臣たち一人ひとりに恫喝をかけて賛否を問うて締結されたとき，判明しているだけでも三十数名のいろいろな立場の朝鮮人が抗議の自決をしているのである。

５）日本が韓国を強制合併した1910年８月以降の各新聞社の社説にはおしなべて「日韓併合」を正当化する論調で占められている。その論点を整理したものを紹介すると[4]，

① 古代においても朝鮮が日本に併合されたことがあるから，「併合」は古代への復帰だとする復古論。
② 同祖同根論に基づく自然的趨勢だとするもの。
③ 朝鮮人の幸福増進のためとする植民地似非幸福論。
④ 旧朝鮮王朝の悪政強調と朝鮮独立不能論に基づく「併合」不可避論。
⑤ 「併合」が日本にとって利益よりは負担増大になるとするもの。
⑥ 天皇の赤子慈愛論と主権譲渡論。
⑦ 日清・日露両戦役での犠牲の代価が「併合」だとするもの。
⑧ 朝鮮人が日本の「保護政治」を支持した結果が「併合」だとするもの。

このような論調は，日本帝国政府が発信してきたものであり，大多数の知識人や一般世論も大同小異である。韓国強制合併にむかう日本の政策自体を批判していた幸徳秋水などの論者は，この直前に「大逆事件」（1910年６月）というでっち上げ陰謀によって逮捕さ

れていることも銘記すべきであり，そこにも周到で狡猾な国家略奪行為としての「併合」の本質が露呈されている。

これらの主張を聞かされた韓国民衆の憤りと不当な屈辱感は想像を絶する。これらに共通しているのは，すべて根拠の無い一方的な独断の押しつけにすぎないということである。朝鮮固有の歴史や文化についての一片の関心も理解もなく，朝鮮の人々は日本をどのようにみているかという他者の視点がまったく欠落している。

Ⅱ．韓国強制合併前後の旧日本基督教会の論調

このような日本による朝鮮への侵略と植民地支配推進政策の中で日本のキリスト教会がどのような言動をとったのかを，政府や一般世論と照合しながら検証を行なっていきたい。なぜなら，いまだに戦争責任・戦後責任は未清算であり，その背後には36年間の植民地支配によって日本人側にもたらされた歴史的罪過への鈍感さや対アジア認識の歪みから日本人がまだ解放されていないという課題があると思われるからである。そのなかではたして日本のキリスト教会はそのような課題の枠外にあるといえるのだろうか。たとえ「純粋で善意の」宣教的動機で未来のヴィジョンを語ろうとも，歴史の現実と向き合いながらでなければ，石地にまかれた種のように根をおろせず，鳥に食べられるのが落ちである。

そのような作業の一環として，当時の旧日基の中の言説をとりあげ，検討を加えていくこととする。

1）日清戦争前後

①「我大日本は東洋の盟主なり。東洋の先導者なり。宗教に於て，政治に於て教育に於て技芸に於て，其他百般の事。東洋諸国に冠たり。我等は東洋諸国を導くの責任を有せり。我等は今東洋伝道策を講ずるの責任を有せり。我等は東洋諸国を伝道するの天職を有せり我之れを信ずる事久し。今夏僅かに時を得たれば先づ直ちに朝鮮に渡航して其実況を観察したり。釜山に泊し。仁川に渡り。京城に寓し。商人と交り農夫と談し。学生と会し。貴公子と語り，官吏と問答して略々彼の地の現況を明かにする事を得たり。以為（おもえ）らく先きに我れ日本にありて東洋を伝道するは我日本の天職なりと確信したりしか益々其信仰を堅ふするに足るなりと其宗教其政治其教育，其他百般の事を看来る時は実に伝道せざるべからざるを知る。日本に勝りて早く救はざるべからざるを知る。・・・

世界の文明を生み，之を教へ之を導きまた之を護る者は基督教にあらずや。基督教は実に文明の文明にして，全世界の依て動く大動機なり。此大動機，此の文明の文明にして，若し朝鮮に入り支那に入らずんば，東洋文明の扶植未た容易に期すべからざるなり。」

（「福音新報」1892,10,21.島貫兵太夫）[5]

ここには，日朝修交条規という不平等条約で富を蓄積して自信をつけ，西南戦争で勝利し，天皇制が一定の浸透をはたし，帝国憲法が発布されて明治政府の権力基盤が安定してきた雰囲気が表現されている。東洋の盟主となろうとする明治政府の侵略的方針を，ここではあまりにも単純に肯定し，みずから誇大に宣伝し，キリスト教の伝道こそがその中心にくるべきだと主張している。そこには，キリスト教の優位性のもとに日本の優位性を前提とした伝道の使命の鼓舞がみられる。その根拠として，キリスト教が「文明の文明」「世界の大動機」であるとの歴史観が語られる。そして，それゆえにキリスト教は「東洋文明の扶植」すなわち東洋文明の再生また活

性化の基盤となるものと位置づけられている。これは西洋文化の前例を念頭においての論理であろうし，たしかに宗教と文化との内的な関連はどこでも確認できることではある。しかし，西洋文化の源流にはヘレニズム，ヘブライズムそして各地域の多様な民族的慣習や伝統なども絡み合って介在しているのであって，当時の情報や歴史的知識の制約を勘案しても，あまりにも単純な発想といわざるをえない。

②「朝鮮を開導するは日本の責任なり。之を開導せんと欲すれば，健全なる学問を伝へ，霊性を救ふの福音を教へざるべからず。吾らは基督教徒として己れの特有する所のものを朝鮮に伝道し，以って帝国道徳上の責任を果たすの偉業に寄与せんと欲するものに非ずや。」（「海外教育会」，「福音新報」第40号。1894，2，14）

これは，朝鮮への伝道と教育が計画されたが，結局「基督教」の看板をはずし，朝鮮人への伝道ではなく，純然たる教育から着手しようとの動きに対する論評である。ここには，キリスト教ならではの伝道に専念することと，それがひいては帝国の道徳上の責任を果たすことにつながるという有用性を持つとの自己理解が表明されている。この論説以外にもキリスト教が日本の倫理・道徳を高める面で役に立つという主張は多数見出される。ただし，政府の帝国主義的政策全体を肯定し前提とした枠内での主張である。

③「戦争は破壊なり，然れども或時に於ては，また或点より之を見れば，戦争は実に文明の使者なり。就中文明国が野蛮国を征服するが如きに於ては尤も然りとなす。（略）　今や我日本が支那に対する戦争は，方に是れ此文明の使者にあらずや。日本の支那に打勝つの度に比例して世界の文明は，次第に其藩籬を拡げつつあることを記憶せざる可らず。

凡そ人を教ゆるには，言論以上のものあることを知るを要す。頑迷不霊にして，幾度繰返して之に教ゆるも嘉言其耳に入らず，幾度繰返して之に示すも善行其身を律すこと能はざる者に於ては，則ち之に鞭を加へざる可ざる。文明国の野蛮国を教ゆる猶ほ此の如し。戦争は実に文明国の野蛮国に与ふる教訓の鞭なり。文明は実にこの鞭によりて扶植せらるるなり。・・・

誰か韓国の現状を見。韓国の同胞を愛するものにしてキリスト教の伝道を必要ならずと云ふか。今其時にあらずと云ふか往昔は彼れ我国を啓発せり。文明の器彼が手を通して来れるもの多かりき。今我れは彼に負へる所を果たさずんばあるべからざるの時期に達せり。欧米の同胞我れをキリストに導きたるは我をして又他を導かしめんが為なり我れ豈に独り受けて他に与ふるの義侠心なくして可ならんや。否な我国民は与られずとも他に与ふるの義侠心を有せり。此れ大和民族の特質なり。」

『歴史の危機，文明の扶植』（「福音新報」1894，10，26）

長い引用になったが，日清戦争が始まって２ヶ月後の状況があらわに反映されている。自分たちを文明の側におき，清国や韓国を野蛮の側においたうえで，戦争を文明化への手段として正当化している。さらにその同じ流れで，キリスト教の伝道の必要性が叫ばれている。かつては韓国が日本に文明を与える側だったが，これからは日本が欧米から与えられたキリスト教を与えるときであり，さらには，与えられなくても与える義侠心を持っているのが大和民族の特質とまで自己礼賛している。文明とキリスト教と大和民族とが混然

一体となった優越意識と欺瞞的な犠牲精神とによって，戦争を全面的に肯定している。甲午農民戦争でなぜ農民が朝鮮全土で決起しているのか，にすこしでも思いを馳せてみるという態度がまったくない。情報量の不足や歪曲だけではすまされない問題がそこにはある。

2）日露戦争前後

①「韓国に至りて先ず目に着くは，多くの禿山と荒原である，もし是れに十分殖林をなし又開墾をなさば，ドレ丈の富源を得るか知れぬ，山も原も決して地味は悪くないと云ふことである，今の儘に放任して置くは甚だ惜しきことである，・・・

余は神が我国民の膨張発展するハケ場に朝鮮を備え置き玉ふたものと信ずる。遠く布哇（ハワイ）メキシコ等に移住するのも悪くはあるまいが，東洋百年の大計より考ふるも，土地気候風俗の相近似せる朝鮮に移住殖民を企てるは，尤も適当必要の事と思ふ。

朝鮮に往つて誰にでも直ぐ気の付くのは，豚小屋の様な憐れな家と，神武天皇様時代の様な風装をして（白衣を着，冠をつけ，口に二尺余の長煙管を咬へつつ），優々閑々と歩み居る韓人の妙な姿であらう，怠惰と云ふは実に彼等の特徴である，而るに宮川経輝氏は更に一特徴を見付け出して曰く，韓人の目は半ば死んで居ると，成程其顔面青くして眼に生色なくドロンとして居る所，其の元気希望なく少しも自任の志なきを示して居る，日本人の目にも會ては力なかりし・・・」

貴山南海生『朝鮮見聞録』（「福音新報」第442号。1903,12,17）

なぜ禿山と荒原なのか，それはほかならない日本の収奪の結果であることに思いがいたらない。それどころか，さらに儲けようとの野心丸出しである。朝鮮人に対する偏見に満ちた叙述は，これがキリスト教の一応公的な性格をもった情報誌なのかと疑うほどである。朝鮮人に元気希望がないのは，日本の侵略がますます悪化したためであるのに，朝鮮人自身の責任にしている論理は，「停滞史観」そのものである。論述者をふくめ日本人を見て，目をいきいきと輝かせる朝鮮人など一部の親日買弁資本家以外にはいないのが当然である。

②「日本人は蠢爾（しゅんじ）として狭い所に徒に蟄居せず，潮の如く亜細亜大陸に押し上がって行かなければならない。斯くて朝鮮をも満州をも日本人で満たせ，其の政治にも教育にも商業にも宗教にも日本人の主義が自由自在に行はれるやうにならなければいけない。此の如くなれば縦令（たとい）名義上では朝鮮帝国でも支那の領土でも，実際は日本帝国なのである。・・・日本人の膨張の先頭に行くものは，決して商船旗でもなく領事の旗でも無論ない。実に醜業婦の類である。世界の全面，日本人が居る所と云たら恐らく醜業婦の其の中に居ない所はあるまひ。日本の膨張は実に日本の腐敗した部分，汚れた部分が真先に出ていくのである。」

植村正久『国勢と基督教』（「福音新報」第466号。1904，6，2）

日露戦争の行方を見通すという趣旨の文章の一部であるが，本当の勝利は「日本人民の平和の力」すなわち「民族的帝国主義」でもって満州・韓国に出て行くことが大事であるとの主張である。ここにも，露骨な膨張主義が「平和の力」として鼓舞されている。そのうえで，「醜業婦」のような日本の汚れた部分が先頭をきっていく実態への批判とともに，国民の品格の高さが求められていること，それゆえ品格を築くキリスト教が国内に充ち，そうしておおいに出て行くべきだ，というの

である。社会批判の体裁をとっていて，じつは大本で政府の移民政策という名の侵略と戦争とを根本的に支持している論法である。

③「・・・朝鮮問題の如何は我が帝国の生存に影響を及ぼすものなるが故に我帝国が二大国に対して前後二回も義戦を断行せるはまた止むを得ざる次第と云べし。

朝鮮の独立に就ては久しく世人の論ずる所にして我邦が既に征清の師を起し今や復た大兵を挙て露国と交戦しつつあるも畢竟其主旨の重なる一理由は同国の独立を扶植するに在り，斯の如くして我邦は朝鮮の為に既に偉大なる犠牲を為したり，吾人は将来之が為に益々尽す所無かるべからず，蓋し之を救はんには宜しく之を救ひ得るの道を講究せずんばあらず，然らば如何にして韓国を救ふべき乎は吾人が自然到達すべき重要の問題たるべきなり。(略)」

坂本直寛『韓国と其拯救』(「福音新報」第508号。1905，3，23)

朝鮮が日本の防衛線であるとする明治政府当初からのプロパガンダをそのとおり間に受け，それを前提として日清・日露戦争を肯定している。さらに，両方の戦争とも韓国の独立を守るためであるという，政府の口実の丸写しであり，日本の犠牲のみを強調し称賛している。なぜ，韓国の人々の多大な被害には関心がないのか。

④「今夫れ吾人朝鮮の国状を察するに恰も右に述たる枯骨の如く見ゆるなり，朝鮮は国民的独立既に其体面を失へるものと云ふべし，啻に体面のみならず其精神をも活力を失へり，幸にしてイスラエルの民の如く未だ捕はれて他国に流離するに至らずと雖も其国民的精神は既に四散して恰も散らされたる迷羊の如く一致あること無く，彼らは有形的国家機関と雖も全備したものあるを見ず，殆ど無政府的にして国民の生命財産安固ならず，民権無く自由無く国権又甚だ萎微に陥れり，今之を救ふ固より政治的に社会的に其民の程度に応じ其国状に顧みて之が必要なる機関を与へざるべからず・・・(略)

若し夫れ出来べくんば我邦教会の実業家はかの国の兄弟らと計り模範的実業を開始し以て彼我貿易上に正しき実例を示す是れ亦甚だ肝要の務と云ふべし，・・・」

坂本直寛『韓国と其拯救』(「福音新報」第522号。1905，6，29)

旧約聖書エゼキエル書第37章の「枯骨の谷」の幻に朝鮮をなぞらえているが，同じ筆者は③では日清・日露戦争が朝鮮の独立を守るためと主張しながら，その脈絡は跳んでしまい，もはや独立を失い国として成り立っていないと誇大に吹聴している。だれが独立を妨害し混乱を引き起こしているのか，日本ではないかという当事者意識がない。しかも事実は，戦争後も朝鮮に居座り続けた軍隊を背景に「第一次日韓協約」(1904,8,22) で日本政府推薦の外交・財政顧問の雇用を強要しており，朝鮮は独力で独立できない状態だ，と宣伝しながら独立を奪っていく政府のやり口にはまってしまい，お先棒を担いでいる有様である。しかも，この文章が掲載されるすこし前の1905年５月から，日本の侵略に対する後期義兵闘争が始まっており，それをもって韓国の国家機能の喪失と混乱と受け取っている可能性が高く，現状認識の深刻な倒錯である。

さらに，日本のキリスト教徒実業家に朝鮮のキリスト教徒らと合同で模範的実業を起こすよう勧めているが，すでに朝鮮の企業は有利な条件の日本企業との競争で大半が潰されており，あまりにも実態を知らなさすぎる。日本政府はすでに早くから，朝鮮の民族資本

を抹殺しようとの政策を遂行していたことと，朝鮮が貧しくされている現状との相関関係への認識が欠落しているといわなければならない。

3）韓国強制合併前後

①「彼らは聖書を学ぶに甚だ熱心である。・・・彼等は概して比較的に外の朝鮮人よりも清潔で，精勤で，正直で，半島人民の中に多くの点に於いて，見事なる異彩を放って居るとは，彼等を精密に観察したるものの批評である。」

『朝鮮の基督教（1）』(「福音新報」第793号。1910，9，8）＊発禁処分

日本の教会は朝鮮キリスト教に対して，日本よりもはるかにキリスト教が受け入れられ，盛んになっていることは羨望を懐いて認めていた。それを率直に表明しているのが上記の文であるが，当局から発禁処分とされた。他の朝鮮人には否定的な評価をおこなう中で，キリスト教徒だけはそうではない，と持ち上げているやり方には屈折した感情が反映しているのだろうか。いずれにしても，すこしでも朝鮮人を肯定的に評価する言説は，とくにキリスト教について朝鮮総督府は細心の警戒感をもっていただけに発禁処分とされたと思われる。1907年に爆発的に高まった信仰復興運動の背景には，日本の侵略や社会矛盾の閉塞状況からの叫びという要因があり，総督府はキリスト教対策を最重要課題としていた。そのようなきびしい状況におかれていたことをふまえて，このような文章になったとは文面からはうかがえない。すくなくとも非キリスト教徒の朝鮮人に対して失礼であり，キリスト教の優位性をこのような仕方で主張することこそ品位に欠けるといわざるをえない。これまで引用してきた文章でも一貫して共通しているのが，キリスト教の優位性の主張である点には留意しておきたい。

②「朝鮮人の日本に対する感情はどうであらうかと度々受ける疑問であるが，亡国の恨骨に徹して忘れ難きものがあらう。表面穏であっても勢に制せられて仕方なしに服従して居るものであらう，とは何人の心にも思ひ浮ぶことである。しかし事実は全く相違して朝鮮人の多数は日本の善政に次第に悦服するやうである。（略）

日本人の朝鮮人伝道も計画せられて居るように聞く。至極結構なことである。唯これは中々容易ならぬ困難な問題であって，また関係の広い問題であることを知らねばならぬ。彼の憐れむべき朝鮮人の為に身命を献ぐるものは誰ぞや。」

『朝鮮人と其の基督教』大谷生（「福音新報」第813号。1911，1，26）

韓国を強制合併して半年ほど経過したころの文章であるが，朝鮮人の日本に対する感情をとりあげていること自体めずらしい話題である。前半では一般論として，朝鮮人は日本の「善政」を喜んでいるから心配ないとしながら，いざ日本人が朝鮮人に直接伝道する計画の話しになると，なかなか複雑で困難だと慎重論に急変している。本当に朝鮮人が日本の「善政」を歓迎しているなら，なぜ伝道が困難なのか。この矛盾した言説に，朝鮮人の日本に対する深い憤りを感じている論者の自己弁護が現れているといえよう。

③「明治43年9月日鮮合併成るや，傳道局は朝鮮に特別傳道を挙行するに決し・・・，大会に於ても亦朝鮮に於ける長老教会との関係及び傳道に関して画策する所あり・・・，彼我互に協力して同地の傳道に當らんことを協議し・・・，彼よりは未だ何等の回答もなかりき。」（山本秀煌「日本基督教會史」明治44年10月記述）[6)]

この記録は，日本の教会がいかに朝鮮とその教会の状況に関して絶望的なまでの無知ないし自己欺瞞的であったかを物語っている。韓国を強制合併し強奪しておいて，それを機会に協力して活発に伝道しようとの呼びかけは，「韓国併合」への全面的肯定の表明を意味し，そのうえで同じ長老教会同士の交流・協力ならば政治的葛藤ものりこえられるかのような安易な幻想を放散しているだけで，事態の深刻さがまるで意識されていない。あまりのおめでたさに，韓国の教会から何の返答もないのは当然であろう。

じつはこのすこし前，韓国強制合併後，朝鮮から29名の牧師一行が下関，大阪を経て東京を訪れ，富士見町教会で日曜の礼拝に参加，代表が説教し，聖晩餐を共にした。この席上，植村正久牧師は，「近頃の研究によれば朝鮮と日本とは其の祖先を同うして居ると言ふ説がある。其れに今日では政治上も一つになって居る。さらに深い信仰の上から言へば，主にあって一つである。・・・」と語った。[7]

その後の午餐会で，日本基督教会教役者を代表して川添万寿得氏は長い挨拶の中で，「我々神の摂理を信ずる者に取りては朝鮮と日本との間に国家的境界を撤去し，日鮮両民族が同一国民となったといふことはなかなか意味の深いことである」と語っている。[8]
これらに対して朝鮮の朱孔三牧師は，日本のキリスト教徒数がごく少数であることへの悲観と「主によって生れ替わる」伝道の必要性を強調した。日本の教会が政府の植民地政策とまったく同一歩調をとっていることの要因をこのような表現で，むしろ哀れんで励ましたものと受けとめられる。

後日，このときに参加した朝鮮人牧師三人の日本観が「福音新報」に掲載されており，そこでは，「内地に於ては精神的文明が物質的文明に伴はざることを感じざるを得なかった。是れは自分が深き愛を以て言ふことであるが，日本人は物質的文明を神と思って居る」とか，「氏は羅馬書にある立てりと思ふものは倒れざるやう慎むべしとある句を引いて，日本は今傲慢に成って居るから最も危険であると言ったさうである」と紹介している。[9]

ここには，韓国強制合併への直接的批判が困難な状況の中で，なおかつその問題性にまるで気づいていない日本の教会に対する間接的な訴えがこめられているといえよう。

なお本論考では詳論を割愛するが，植民地支配が進行し，３・１独立運動や労働争議など朝鮮民衆の広汎で根強い抵抗が続けられる中で，それらを徹底的に弾圧して日本はファシズム期に入っていく。この間の朝鮮のキリスト教に対して日本の教会は，主に三点について批判している。[10]　一つは朝鮮の教会には「政教分離」が必要なこと。これは紆余曲折しながらも朝鮮民衆の苦難を共に担ってきた教会を「政治的」だとする無理解であり，日本の教会こそ政府の政策を無批判に吹聴する政治的発言を行なっているという自分の姿が見えていないというべきである。「兄弟の目にあるおが屑は見えるのに，なぜ自分の目にある丸太に気づかないのか」（ルカ６：41）との批判は，日本の教会が真剣に聞くべき事態であろう。二点目は，朝鮮の教会は旧約的・律法的・ユダヤ教的であって，それに対して日本の教会は新約的・福音的であるとの評価である。これは植民地支配下の苦難を古代エジプトの奴隷とされたイスラエルの民に重ね，それからの解放を求めるなど，旧約聖書をとりあげる説教が多かったことを指しているが，そういう分け方で批判することがむしろ異端的ですらある。旧約も新約もひとしくキリスト証言の書であり，新約が福音的で旧約は律法的・ユダヤ教的で劣っているとする日本の教会の批判の規準自体がみずからの信仰告白文にも矛盾しており，グノーシス主義的異端ないし反ユダヤ主義的傾向が強くなっている。これは三点目の，朝鮮のキリスト教は欧米の

影響から脱して「東洋的・日本的キリスト教」に変わるべきである，との主張へと関連していく。

Ⅲ．朝鮮人の日本観

さきに，日本人および日本の教会には，朝鮮人が日本をどう見ているのかという他者からの視点が欠落していると指摘しておいた。時代により，立場により変化はあるが，日本人は野蛮な禽獣，強盗，悪鬼であるというのが，朝鮮人の一般的な見方である。ここでは朝鮮人の日本観について代表的といえる安重根の著述を紹介しておく。

安重根(アン・ジュングン)「獄中記」から

「日本が露国と開戦したとき，その宣戦布告書に，東洋平和の維持，韓国の独立の堅持を謳いながら，今日に至るもそのような信義は守られず，かえって韓国を侵略し，五ヶ条の条約，七ヶ条の条約を結んだ後，政権を掌握し，皇帝を廃位し，軍隊を解散し，鉄道，鉱山，森林，河川などみんな掠奪してしまった。さらにまた，官衛の各庁や，民間の邸宅を兵站の必要と称してこれを抜（発）掘している。その禍いは生きているものだけでなく，先祖にまで及んでいる。その国民たる者，その子孫たる者で，誰かその怒りを忍び，辱めに耐え得る者があるだろうか。したがって二千万の民族が一斉に憤起し，国内全体で義兵が各地で蜂起している。ところが彼の強賊どもは，かえってこれを暴徒とみなして兵を出動させて討伐し，極めて悲惨な殺戮をしている。ここ一両年の間，韓国人の害をこうむるものは十万余に及んでいる。国土を掠奪し，生霊を辱める者が暴徒なのか，みずから自国を守り，外敵から防禦する者が暴徒なのか。・・・日本の対韓国の政略がこのように残虐である根本をなすものは，すべていわゆる日本の大政治家，老賊である伊藤博文の暴行であって，韓民族二千万が日本の保護を受け，現在太平無事で日ましに進むことを願うといつわり，上は天皇を欺き，外は列強を欺き，その耳目を掩うてみだりに自ら奸策を弄して非道の限りを尽している・・・。

わが韓民族がもしこの賊（伊藤）を処罰しなければ韓国は必ず滅亡し，東洋はまさに滅びるであろう。」[11)]

これはウラジオストックで義兵を組織するとき各地で語ったものとして執筆されている。彼は義兵将として，独立闘争の一環として伊藤博文を射殺した。この主張は，安重根個人の「過激」で「突出」したものではなく，彼が「義士」また愛国者として尊敬されていることに明らかなように，ほとんどすべての韓国人の状況認識と思いを代弁したものとして受けとめる必要がある。

Ⅳ．結語

これまでの検討をとおしてあきらかにされた要点を述べ，そこに介在する歴史的，思想的要因を考察しておきたい。

まず，Ⅱで挙げたような言説は，けっして例外的なものではなく，むしろ教会主流派である。これらを「時代の限界」として済ましてもならないし，単に論述者の個人的道徳の評価にすりかえるのも間違いである。明治以来，日本のキリスト教は「異質な他者」という政府と社会からの大きなプレッシャーに直面してきた事情を勘案するならば，なんとか日本社会に受け入れてもらえるようにとの願いが高じて順応主義に陥ってしまったとの指摘もできよう。[12)]

しかしもうすこし細かく見ていくと，明治政府は一貫して西洋の進んだ技術だけは採り入れるが，その精神的基盤とされるキリスト教は採り入れず，替わりに天皇制と国家神道とを充てようとしてきた。いわゆる「和魂洋

才」である。このことに対する不満が，日本のキリスト教の思想的根底にあるのではないだろうか。それが，キリスト教こそ文明の文明であり，帝国の道徳面での使命をはたすべきであるなどという自己主張となって表現されている。自分たちこそすぐれた西洋文明の源である宗教を信じているのに，それが正しく評価されていないという悔しさがにじみ出ている。それと同時に，実態としてはアメリカ的な自由な教派教会であるにもかかわらず，観念的には欧州的な国家教会的発想により親近感を懐いているために，国家や国策への批判的アプローチが鈍く，むしろ積極的に同調するのが当然という感覚であるように思われる。

これらが重なり合って，日本帝国主義と一体化した路線を突き進み，ファシズム期には，キリスト教こそ「内鮮一体」「八紘一宇」の使命を真に実現することができるのだ，天皇の帝国の理想を成就するのはキリスト教である，というまでに至るのである。なるほど朝鮮総督府の強圧政策や日本人の乱暴でごう慢な態度への批判は行なったが，植民地支配それ自体の不当性への批判はない。そして目立つのは，キリスト教こそ天皇の統治を真に成就するものである，との優位性の主張である。それは，キリスト教が西洋文明の基盤であるように東洋文明の基盤ともなりうる偉大な力を持っているはずだという，あまりにも単純な歴史観と安易な期待とから由来しているといえよう。いずれにしても，みずからの優位性と有用性とによって福音宣教をはたそうとしたという誤謬をそこに指摘できるのではないだろうか。それでも日本社会はキリスト教を正面から受容したとはいえないまま今日に至っている事実は重い。

このような誤謬に陥らないためには，どういうことが必要だったのかを問わなければならない。すくなくともいえることは，朝鮮のキリスト者とのもっと頻繁で率直で真実な交流を築いておくことではなかったか。それによって，先に引用したような朝鮮への一方的な決め付けから解放され，日本が朝鮮に対して行なっていることが何なのかを，隣人の視点から知らされたであろう。また，たとえ日本での教会の立場がさらに困難になっても，朝鮮の教会との連帯をとおして共に苦しみを共有し，正義と公正と愛が支配する神の国の福音を証言することができたであろう。日本がさらなる侵略戦争に突き進むことに対して，流され，協力するのではなく，たとえ無視されようともなすべき批判と警告とを発することもできたであろう。

日本における宣教の課題また東アジアの諸教会との交わりの回復と協力とを展望するに際して，この百年をふりかえることを欠かしてはならない。韓国を国ごと奪い，その中で日韓・日朝相互の関係の歪みが複雑化した。奪った日本の側にも，差別を当然視するような「植民地支配者根性」というべき精神的歪みや社会制度的歪みをもたらしてきている。日本の教会は，これらの課題の克服へのとりくみをとおして同時進行的に福音の進展がもたらされるであろうという歴史的脈絡にあるといえよう。

［注］

1）呼称について，従来の「日韓併合」は，とくに「併合」という言葉が国家略奪の実態を隠匿するために日本政府官僚が作り出した造語であり，その「合法性」「正当性」主張のために用いられているため，多くの韓国・共和国，在日の人々には不快感や屈辱感を与えるゆえ適当ではない。当時は現在の韓国・共和国を含めて「大韓帝国」であったので「韓国併合」とか「韓国合邦」など用いられているがまだ確定してはいない。ちなみに韓国も共和国も「韓国併合」は不法・不当（国際法上からも，歴史的実態からも）であり，当初から無効であるとの立場であることは重く受け止めるべきであろう。詳細な議論については，参考文献中の『東大生に語った韓国史』『韓国

併合と現代』を参照。また本文中，「韓国」「朝鮮」と両用するが，概して「大韓帝国」を念頭においた場合は「韓国」，「朝鮮王朝」および長い歴史的背景を意識した場合は「朝鮮」を用いるが，当時の文献の表現に対応している場合もあり，厳密に区別しているわけではない点，了解いただきたい。

2）以下の叙述は，『韓国民衆史』（韓国民衆史研究会編著），『朝鮮人の日本観』（琴秉洞），『東大生に語った韓国史』（李泰鎮），『朝鮮史』（梶村秀樹）に負うところが多いが，逐一の引用箇所表示は省略する。

3）在日朝鮮人数と在朝鮮日本人数の推移（単位：人）

	在日朝鮮人	在朝鮮日本人	
1895年（明28）	12	12,303	1894-5 日清戦争
1900年（明33）	196	15,829	1904-5 日露戦争
1905年（明38）	303	42,460	日韓保護条約
1910年（明43）	(790)	171,543	韓国強制合併（ ）は1909の数字
1915年（大４）	3,917	303,659	1910～土地調査事業
1920年（大９）	30,189	347,850	1920～産米増殖計画
1925年（大14）	129,870	443,402	1923関東大震災
1930年（昭５）	293,091	527,016	1931満州「事変」
1935年（昭10）	625,678	619,005	1937日中全面戦争
1940年（昭15）	1,190,444	707,742	1939朝鮮人内地移住に関する件
1944年（昭19）	1,936,843	712,583	1941アジア太平洋戦争

＊出典：在日朝鮮人数は「在日朝鮮人処遇の推移と現状」（『法務研究』43巻３号1955）
在朝鮮日本人数は，森田芳夫『朝鮮終戦の記録』（厳南堂，1964）
※田中宏氏提供による。

4）姜東鎮『日本言論界と朝鮮』７頁。

5）以下，「福音新報」からの引用は，すべて『日韓キリスト教関係史資料』からのものである。紙幅の関係上相当割愛しているので，全文はそちらを参照されたい。なお引用中の用語はすべて当時のままであることを断わっておく。

6）山本秀煌『日本基督教會史』明治44年10月記述，309頁。

7）「朝鮮牧師礼拝」（「福音新報」，1911年８月10日，第841号）。

8）同上。

9）「朝鮮牧師の日本観」（「福音新報」，1911年８月24日，第843号）。

10）徐正敏『日韓キリスト教関係史研究』，187-219頁。

11）琴秉洞『朝鮮人の日本観』，120-121頁。

12）徐正敏，前掲書。220-238頁。

参考文献（順不同）

徐　正敏（ソ・ジョンミン）　『日韓キリスト教関係史研究』日本キリスト教団出版局，2009年。

土居　昭夫　『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社，1980。

川瀬　貴也　『植民地朝鮮の宗教と学知』青弓社，2009年。

李　泰鎮（イ・テジン）　『東大生に語った韓国史―韓国植民地支配の合法性を問う』明石書店，2006年。

李　泰鎮・笹川紀勝編・著　『韓国併合と現代』明石書店，2009年。

梶村　秀樹　『朝鮮史』講談社（講談社現代新書），1977年。

韓国民衆史研究会編著・高崎宗司訳『韓国民衆史』（近代編1875-1945），木犀社，1989年。

河　宇鳳（ハ・ウボン）著，金両基監訳・小幡倫裕訳　『朝鮮王朝時代の世界観と日本認識』明石書店，2008年。
姜　東鎮（カン・ドンヂン）　『日本言論界と朝鮮』法政大学出版局，1984年。
琴　秉洞（クム・ビョンドン）　『朝鮮人の日本観』総和社，2002年。
池　明観（チ・ミョンガン）・小川圭治編　『日韓キリスト教関係史資料』新教出版社，1984年。
閔　庚培（ミン・キョンベ）著，金忠一訳　『韓国キリスト教会史』新教出版社，1981年。
山本秀煌編纂　『日本基督教會史』日本基督教会事務所，1929年。

[Abstract]

Colonization of Korea and Christianity in Japan：
In the Case of The Former Christ Church in Japan
(Kyū Nihon Kirisuto Kyōkai)

Kiyotaka KOGA

The Japanese Meiji government had the certain intent to gain Korea from its start. At last, Japan stole Korea's national independence and colonized it in 1910. In this paper we research the articles of Japanese Christians on the matter of Japan-Korea relations, and criticize them in the light of their historical situation. Then, we can find that Japanese Christians, with almost all of the rest of the Japanese, judged the Korean people and society to be late in respect of modernization, and believe that Japan should help it. But the real matter is the disturbance of the Korean's own efforts to modernize. Though it is the truth, they received joyfully the colonization of Korea. It is because of their assimilation themselves to the Japanese Government and National ideology called "Tennou-system" (天皇制), which justified the invasion of another nation in the name of peace around East Asia. We consider the reason of such a misleading belies from a view point of historical and political factors.

Key words： Colonization, Korea, Christianity, Japan